接続表現「ばかりに」の意味分析

趙妍姍

本発表では，「郊外に家を建てたばかりに，往復 3 時間 20 分もかかる」のような原因・理由を表す「ばかりに」について，次の三つのことを述べる。

①「ばかりに」の後件は「本来なら生じなくてよい不必要なこと」というマイナスの結果であり，前件は「マイナスの結果をもたらす決定的要因」である。

②「ばかりに」の前件には「回避しようと思えば回避できた不必要なこと」という意味が含まれる。

③「ばかりに」は前件と後件に「不必要な（余計な）こと」という評価的意味を加える表現であり，それは「甘い物ばかり食べている」のような限定の「ばかり」が「事態の程度が一定の範囲に収まらずに過剰である」という意味を表すことと関係する。

「ばかりに」の前件は，後件に対する「唯一の原因」と説明されることがあるが，「ばかりに」と唯一の原因を表す「というだけ（程度）の理由で」は同義ではない。また，前田直子（1997）「原因・理由を表す「ばかりに」と「からこそ」」（『東京大学留学生センター紀要』第 7 号）は，「ばかりに」の前件を「実現が期待されていなかった最低条件」と説明するが，それ以外に「回避しようと思えば回避できた不必要なこと」という意味を含むことも重要である。中里理子（1995）「「だけに」「ばかりに」の接続助詞的用法について」（『言語文化と日本語教育』第 9 号）は，「ばかりに」の後件はマイナスの結果とは限らないとするが，そのように見える例を含め，「ばかりに」の後件は「本来なら生じなくてよい不必要なこと」というマイナスの結果と説明できる。「ばかりに」の評価的意味は，「ばかり」の限定の意味と直接結び付けて説明されることがあるが，それよりは，「ばかり」の「事態の程度が一定の範囲に収まらない」という意味と結び付けて説明するほうがよいと考えられる。

接尾辞「上（じょう）」を後要素とする語の機能　―機能の移行と移行の条件について―

張希西

本稿は接尾辞「上（じょう）」を後要素とする語「―上」を取りあげ，それが文においてあるいは文を越えてどのように振る舞うか，またなぜ接続表現のように機能するかについて記述し，検討した。

前接要素自身で完全な内容を表すことができず，修飾部分が必要となるような「―上」の用法は，語構成要素「上（じょう）」の接尾辞化による「句の包摂」現象に由来するものであると考えられる。「―上」の意味用法は前接要素である名詞の意味に影響されるが，修飾部分が直前にきて，「―上」が前件と共に後件に対する原因・理由を表す場合，接続助詞のように機能する。これに対し，修飾部分が前文または前文脈にあり，「―上」は単独で使用され，後件と共に前件に対する情報付加・補説の働きをする場合，後続内容との緊密度がより高く，接続詞のように機能する。このように，「―上」は前件を受け，後件を継いで，接続表現のように機能する。特に，接続詞のように機能する「―上」は文を越えるのみならず，談話機能をもつ場合もあり，これについては，今後の課題とする。

名詞文にみられる属性叙述の 3 タイプ　―統合関係に着眼した分析を中心に―

中村真衣佳

本発表では，これまで一括りにされてきた名詞文「A が B だ」で表される属性叙述には 3 つの下位タイプがあることを主張する。「花子が北海道生まれだ。」「子供が溺れかけだ。」は，どちらも「A が B だ」文で表される名詞文である。しかし，これら名詞文の意味機能に注目すると，「花子が北海道生まれだ。」が静態性に傾いているのに対して，「子供が溺れかけだ。」は動態性に傾いていることがわかる。

従来の研究では，佐久間鼎（1941）『日本語の特質』（育英書院），三上章（1953）『現代語法序説』（刀江書院）で述べられているように，名詞文は属性叙述文，動詞文は事象叙述文に代表されると考えられてきた。しかし近年，影山太郎（2012）「属性叙述の文法的意義」（影山太郎（編）『属性叙述の世界』pp. 3-35　くろしお出版），益岡隆志（2016）「叙述の類型と名詞文の構造」（福田嘉一郎，建石始（編）『名詞類の文法』pp. 215-232　くろしお出版）では，属性叙述と事象叙述の機能間の連続性が指摘されている。

そこで，本研究では「A が B だ」文の意味機能が属性叙述と事象叙述の連続性においてどちらかに傾く要因を解明することを目的として分析をした。分析は，「A が B だ」文の「B」に置かれる名詞句の語構成という形態的観点と統語的観点に着眼して行い，品詞間の連続性にも注目した。

主な結論は，「A が B だ」文で表される属性叙述には，(1)「時間的限界性をもたない普遍的事実を示すもの」，(2)「時間的限界性をもち静態性がみられるもの」，(3)「性質や特徴に時間的に展開する動態性がみられるもの」があるということである。本発表では，これらを(1)「恒常的属性叙述」，(2)「準属性叙述」，(3)「事象性叙述」と名付けて，名詞文「A が B だ」で表される属性叙述は 3 つに下位分類できること主張する。

排他的限定を表す副詞の意味用法をめぐって

呉慶霞

排他的限定を表す副詞は述語に対して一定の制限が見られるという現象がある。本発表は「ただ」を代表として取り上げ，排他的限定を表す副詞の意味用法を考察し，その意味特徴がいかに文末に制限を与えるかを分析する。

まず，「ただ」の意味についてであるが，使用環境からそれを「特異な属性の不在」を表す基本的意味「ただ 1」とそこから派生した「属性の純粋さの強調」を表す「ただ 2」に分ける。「ただ 1」は他者の存在を必要とし，「ただ 2」はそうでない。また，「ただ 2」は重複形「ただただ」を多用している。重複形を使うのは複数回スキャンニングするためである。複数回スキャンニングし，属性の純粋さが強調になることによってその程度を拡大し，程度表現へと繋がっていく。このことは「限りだ」，「だけだ」などの文末形式との共起可否からも確認できる。また，「ただ 2」は主体が現場においての直接体験であるため，「ただ 1」と違って，人称・モダリティ制約等がある。

次に，「ただ」の文末制限についてであるが，「ただ」は名詞述語文（それ単独の形）に使えない。「ただ」は「他の属性の不在」を表し，つまり，「属性があるか否か」を問題にしているが，名詞述語文は「あてはめ」の関係を表し，「そのカテゴリーに属しているか否か」を問題にしているため，両者の性質が釣り合わない。また，「ただ」の述語は（基本的な）否定ができない。「ただ」はすでに「他の属性」を「不在」として排除した以上，当該属性についてまた否定したら，論理上の混乱をもたらすため，否定できない。同様の理由で疑問もできない。その他，「ただ」という語形の動詞述語文の数は形容詞・形容動詞述語文より圧倒的に多いとう現象も見られる。それは動詞述語はそれ単独の形で「ただ 1」も「ただ 2」も表せる一方，形容詞・形容動詞はそれができないためである。

そして，「ただ」以外の「排他的限定」を表す副詞「単に」・「もっぱら」・「ひとえに」・「ひたすら」・「一途に」等にも「ただ」と同様な文末制限の現象がみられる。「ただ」に関する分析方法はこれらの副詞の考察にも有用である。

コーパスとクラスター分析を用いた副詞の文体調査

中俣尚己

本研究では，日本語の副詞の文体差について，クラスター分析を用いて可視化し，日本語教育などの実用面で利用できる分類方法を提案することを目的とする。

手法としては，教科書やコーパスの調査を通じて初級で導入すべき副詞を選定した島崎英香（2015）「初級日本語学習者のための副詞 90 語の選定―日本語母語話者の副詞の使用実態を通して―」（『日本語／日本語教育研究』6）を基準に，語の文体が異なる類義語を加え，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）の頻度を参考に 164 語を選定した。続いて，BCCWJ で検索を行い，文書ジャンルごとの pmw を計算，さらに副詞間の頻度差をならすことで，単純な粗頻度の影響を排除した。このデータに対して階層的クラスター分析を行った。

結果，６クラスターに分割することが妥当とされたが，うち２クラスターは含まれる語が少なく，元となるデータの歪みが反映されたものであると考えられるため，４クラスターを考察の対象とする。この４つは文体について「あらたまり―くだけ」と「かたい―やわらかい」の２軸で論じるべきであると主張した石黒圭（2015）「書き言葉・話し言葉」と「硬さ／軟らかさ」」（『日本語学』34-1）によって下表のように位置づけられる。

	多いレジスター	語数	例	文体の特性	論説文での使用
C1	知恵袋，ブログ	46	あまり，ちょっと，かなり	あらたまり・軟	不可
C2	国会会議録	10	だいたい，若干，ぜひ	あらたまり・硬	？
C3	文学	61	やがて，しばらく，もっと	くだけ・軟	主観部のみ可
C4	特徴なし	42	最も，ほぼ，特に	くだけ・硬	客観部でも可

日本語接続詞「で」の成立　―文法化の観点から―

百瀬みのり

本発表は，日本語接続詞「で」の成立が文法化の観点から説明されるべき通時的変化であると考えられることを実証的に述べることを目的とするものである。『日本国語大辞典（第二版）』によれば，接続詞「で」は「接続詞「そこで」,「それで」などの「そこ」「それ」が略され，助詞「で」が自立語化したもの」（同，523 頁）とされるものの，その過程については詳しく述べられていない。そこで本論ではそれを明らかにすべく，Traugott（1995）等が主張する文法化の観点から,「そこで」,「それで」から接続詞「で」が成立する過程について，形態，意味，機能の変化について通時的に用例を確認することで実証的に述べる。

発表では，日本語接続詞「で」の成立が接続詞「そこで」,「それで」の指示詞部の省略という共時的な語形変化というよりも文法化の観点から説明されるべき通時的変化であると言ってよいと考えられる証左として，接続詞「そこで」,「それで」から接続詞「で」の成立に際して認められる一連の変化に文法化に含まれる現象があることを述べた。その具体的なものは，近世後期から見られた接続詞「そこで」,「それで」の成立後である近代以降に接続詞「で」が見られるようになったという成立時期の差異，意味の漂白化，再分析，音韻的弱化，語用論機能の強化，接続詞「そこで」,「それで」よりも接続詞「で」の前後に目立って見られる話者交替が聞き手の推論によって理解される対話に見られる，語用論的含意を利用した結果成立する形式であることである。

無助詞名詞の統語的機能　―平安期散文資料を中心に―

山田昌裕

本発表で扱う無助詞名詞とは，格助詞，副助詞，係助詞などが下接しない名詞のことである。研究の目的は，平安期の無助詞名詞が情報伝達上どのような統語的成分として振る舞い，どのようなシステムで運用されていたのかを明らかにすることである。

無助詞名詞の実態として次のａ～ｃが明らかとなった。ａ．無助詞名詞 22052 例のうち，ガ格は 14680 例（66.6%），ヲ格は 6563 例（29.8%），計 21243 例（96.3%）となっており，原則として無助詞名詞はガ格かヲ格であると言ってよい。ｂ．有生名詞は全体の 6138 例のうち，ガ格が 5477 例（89.2%），ヲ格が 609 例（9.9%）となっており，有生名詞はガ格に偏り，ヲ格にはなりにくい。無生名詞は 15914 例のうち，ガ格が 9203 例（57.8%），ヲ格が 5954 例（37.4%）となっており，無生名詞はガ格が優勢ではあるものの，ヲ格も少なからず存在する。ｃ．無生名詞ガ格は非対格自動詞文，形容詞文の主語 8684 例（94.4%）となっている。一方，有生名詞ガ格は他動詞，複文主語，非対格自動詞，非能格自動詞など多様な述語成分と関係している。

ａ～ｃの実態より，無助詞名詞の統語的運用システムは，次のようになっていると思われる。格の標示がないということから，無生名詞はガ格行為者ではなく（つまり他動詞目的語，非対格自動詞主語，形容詞主語），有生名詞はヲ格対象ではない（つまり他動詞主語，非能格自動詞主語，非対格自動詞主語，形容詞主語）という，いわば消極的な振る舞いをする。しかし，ヲ標示というオプションも存在し，情報伝達上の支障はなかった。無生名詞，有生名詞の振る舞いが重なるガ格非行為者（つまり非対格自動詞文主語，形容詞文主語）はいずれも一項述語なので，やはり情報伝達上の支障はなかったものと思われる。このような運用システムがあったからこそ，平安期にはガ格項を表示する専用の助詞の必要性がなかったと考えられる。

国会会議録にみられる〈ら入れ言葉〉の使用実態について

浅川哲也

発表者は，浅川哲也（2017）「ら抜き言葉と〈れれる言葉〉の拡大―日本語母語話者の〈誤用〉問題―」（『文学・語学』第 221 号），および，浅川哲也（2018）「〈ら入れ言葉〉の使用実態とら抜き言葉との関係について―永遠に見れられる・名前で呼ばられる・さらっと食べられる―」（『言語の研究』第 4 号）において，五段活用動詞未然形・可能動詞に「られる」が接続したり，非五段活用動詞未然形に「られる・られられる」が接続したりするなど，形態的に「ら」が過剰に使用されているようにみえる，規範的な文法から逸脱した用法を一括して〈ら入れ言葉〉という名称を付した。本発表は，『国会会議録検索システム』（以下，『国会会議録』）を用いて，『国会会議録』上での〈ら入れ言葉〉の使用実態を明らかにし，〈ら入れ言葉〉の発生についての形態的な要因について考察することを目的とする。『国会会議録』は，昭和 22 年（1947 年）から現在まで約 70 年間にわたる資料の蓄積があり，比較的改まった場面での話し言葉が使用されていると考えられる。〈ら入れ言葉〉について，『国会会議録』を資料として調査したところ，昭和 22 年（1947 年）の第 1 回国会の時期から〈ら入れ言葉〉が使用されていることが確認された。また，『国会会議録』の〈ら入れ言葉〉はすべての動詞の活用の種類にその例があり，受身・可能・尊敬の意味用法で使用されている。『国会会議録』では，1950 年代の〈ら入れ言葉〉の使用数が最も多い。1950 年代の五段活用動詞の〈ら入れ言葉〉が，改まった場面における規範的なア段型未然形への助動詞「れる・られる」の過剰な接続ではないかとみられるのに対し，2000 年代の〈ら入れ言葉〉はエ段型未然形への助動詞「れる・られる」の過剰な接続であるという傾向がみられる。現代日本語において動詞未然形に助動詞「れる・られる」が過剰に接続する形態を動詞の活用の種類別に整理してみると，その形態は〈ら入れ言葉〉にとどまらず，〈れれる言葉〉などの多岐にわたり，規範的な文法からかけ離れたものとなっている。

使用実態から見たハズダのジェンダー性について　―「ハズ。」と「ハズよ」を中心に―

陳秀茵

本発表では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ),『名大会話コーパス』『BTSJ による日本語話し言葉コーパス 2011 年版』を用いて，書き言葉と話し言葉におけるハズダの使用実態を明らかにした上で,「ハズだ。」に比べて「ハズ。」,「ハズダよ」に比べて「ハズよ」のジェンダー性を中心に考察を進めた。以下の 2 点が明らかになった。

第一に,「BCCWJ」において，普通体でハズダを使う場合に,「ハズだ」より,「ハズ。」のほうが多く，とりわけ,「婦人誌」と「女性週刊誌」において,「ハズ。」の出現率は非常に高いのに対し,「ハズだ」は極めて少ない。日本語のジェンダーに関する先行研究はほとんど話し言葉について書かれたものであるが，書き言葉においても女性的表現が存在しているのではないか。さらに，実著者の半分以上が男性であることから，女性読者を想定しているため，女性に好まれる表現を用いるという意図が推察できる。日本語は話し手の性別による言語的差異が多いが，聞き手の性別によるもの（「人称代名詞」「親族呼称」「呼称」）は限られている言語として捉えられている。しかし,「ハズ。」の使用実態から考えると，書き言葉においては話し言葉と異なる性質がある可能性が考えられる。

第二に,「BCCWJ」において，普通体で「ハズダよ」を使う場合に,「ハズだよ」ではなく「ハズよ」という形式も見られ,「文学」と「雑誌」2 つのジャンルに集中的に出現している。それらはほとんど会話文や心理，思考描写文であり，発話や思考の動作手がほとんど女性である。しかし，実際話し言葉コーパスにおける女性の発話では「ハズよ」ではなく，すべて「ハズダよ」が用いられている。そのように，文学作品のフィクションの会話文では作者の性別と関係なく，女性の発話に「ハズよ」が用いられているが，実際の話し言葉では「ハズダよ」が用いられているというギャップが見られた。読者に動作手と発話者の性別を伝えるため,「ハズよ」を用いている作者の意図が窺える。そこから,「ハズよ」は女性的表現として認識され，役割語の一種として定着している可能性が考えられる。

自然談話に見られる否定疑問文の形式，使用数，相互作用における機能

ポリー・ザトラウスキー

本研究は，否定疑問文は自然談話でどのように用いられるかについて考察する。田野村(1988 国語学 152:17,19)の第二類の否定疑問文「ではないか$_2$」は推定を表し，「話者は前の表現の内容を否定してはおらず，寧ろ，それを認める方に傾いて」おり，「山田じゃない（の）（か）（？）」に示すような形は可能である」と述べている。本研究では，「P（述部）ない」「P じゃん」「P だろう」に研究対象を広げ，機能が「ではないか$_2$」に相当するものを考察する。資料は年齢（30 歳未満，30 歳以上）と性（FFF，FFM，FMM，MMM）の 3 人の組み合わせからなる 9 つの自然談話（約 16 時間）である。考察の観点として 1)「P ない」「P じゃん」「P だろう」はどのような形式でどのような頻度で用いられるか，2)相互作用においてどのような機能があるかの 2 点である。従来の研究は，主に研究者の直感，作例，小説やシナリオの例に基づき，否定のほか，確認や同意要求の機能があると指摘しているが，実際の会話で考察している研究は極めて少ない。本研究は「P ない」を含む約 400 の発話の形式と数は若い女性が一番多く，次に若い男性，年上の女性，年上の男性の順で使用率が下がっていた。「P ない」「P じゃん」「P だろう」は自然談話の相互作用において談話の展開と発話連鎖における位置によって，問いかけ，主張，同意要求，前提条件，理由，話題提供，反論等の特徴が見られた。若い男女が「P ない？」を用いた場合はかならずしも同意要求にはならず，主張を表すこともある。若い女性では「P ない？」のうちの「A（形容詞）くない？」が多く用いられた。若い男女によって談話の流れの中で「P ない？」に対する反応が異なっていた。また，若い女性では，一人が「P ない？」を用いた後ほかの若い女性が「P ない？」を用いる一方，年上の女性では「P ない？」に対して相づちによる同意が多かったことから年齢によって同じ形式を異なる機能で用いていることが分かった。本研究により談話の相互作用に焦点を置くことで，相手の発話をモニターしながら自分の描写や評価を変えていく中で動的に意味が作り上げられていることが明確になった。

同一複合名詞のアクセントの融合・非融合の使い分けに影響する文脈的要因

陳曦

日本語の複合名詞には，［ジ˺コボ˻ーエー］（自己防衛）のようにアクセントが中高型の 1 単位に融合する（ 以下，融合アクセント）ものと，［˻オ˺ーザボ˻ーエー］（王座防衛）のようにアクセントとして融合しない（以下，非融合アクセント）ものがある。また，「事故防止」の場合，電車内などに流れるアナウンスでは[˻ジ˺コボ˻ーシ］（非融合アクセント）と［ジ˺コボ˻ーシ］（融合アクセント）のどちらの発音も聞くことができる。

ひとつの複合名詞に複数のアクセントがある場合，文脈や使われ方による使い分けがありうることが指摘されている（NHK 放送文化研究所（編）(2016)『NHK 日本語発音アクセント新辞典』，郡史郎（2014)「日本語の複合語のアクセントについて―基本原理の再検討と長い複合語への応用―」近畿音声言語研究会 2014 年 4 月月例研究会)。本発表では，一般に後部要素が動作性や状態性をあらわす複合名詞（例：事故防止）について，後部要素があらわす意味[動作性や状態性]に焦点を当てる場合は非融合アクセントをとり,そうでない場合は融合アクセントになるという仮説をたて，その妥当性を聴覚的自然度調査によって検証する。

聴取調査から以下の結果が得られた。アクセント辞典に融合と非融合の両パターンが記載されている複合名詞については，動作性・状態性の弱い文脈（複合名詞の後部要素の意味に焦点を当てない文脈）より，動作性・状態性の強い文脈（複合名詞の後部要素の意味に焦点を当てる文脈）における非融合発音のほうが「自然」であると評価されることが多い。融合発音に対して,「自然」であるという評価は文脈の影響をあまり受けない。この結果から，動作性・状態性の強い文脈，つまり，後部要素のあらわす意味に焦点を当てる文では，非融合アクセント発音の聴覚的自然度に上昇効果があることが確認できた。それを踏まえ，同一の複合名詞の場合，そのアクセントの融合と非融合の使い分けには,焦点の当て方の違い,つまり後部要素の意味を取り立てるか否かが影響しているという考え方を提示する。

琉球八重山白保方言のアクセント体系は三型であって，二型ではない

中川奈津子，セリック・ケナン

本発表では，沖縄県石垣市白保で話されている南琉球八重山白保方言のアクセント体系に関する新たな発見を報告する。先行研究では，白保方言と最も近い系統関係にある波照間方言のアクセント体系は 3 型（平板型，下降型，上昇型）であるが，白保方言は 2 型（平板型と下降型）であり，波照間方言の上昇型と下降型にあたる語彙が白保方言では下降型に合流したとされてきた (琉球方言研究クラブ (2007) 『石垣白保方言の音韻体系とリズム=アクセント的構造』 (沖縄：琉球方言研究クラブ); 中川ほか (2015)「琉球八重山語白保方言の音韻」（狩俣繁久(編)『琉球諸語記述文法』I 巻，沖縄: 琉球大学）; 麻生・小川 (2016) 「南琉球八重山波照間方言の三型アクセント」 (『言語研究』150))。しかし，発表者らが現地調査を経て白保方言の 3 人の話者（男性 A，1933 年生; 男性 B，1932 年生; 女性 C，1936 年生）に行った語彙を録音・分析した結果，従来下降型とされてきた語彙は，2 種類に分かれることが判明した。白保方言において下降型とされてきた語彙は確かに全体的に F0 の下降が見られるものの，波照間方言の下降型にあたる語彙 (Fa1) と上昇型にあたる語彙 (Fa2) の下降は特徴が異なり，Fa1 の語彙は大幅な下降を伴うのに対して，Fa2 の語彙は小幅な下降を伴うことがわかった。上述の観察を確かめるため，Praat を用いた音響分析を行った。Fa1 と Fa2 では下降の幅が異なるという仮説の下で，語全体の F0 ピークと語末 80 msec の平均 F0 をそれぞれの語に関して計測した。その結果，Fa1 と Fa2 における，F0 ピークと語末の 80 msec の F0 の差は，Fa1 の方が Fa2 より大きいことが明らかになった。さらに，同じ語彙に対して，男性 B と女性 C から助詞付き例文（主格の=*nu* または奪格の=*gara*）も録音・分析し，助詞付きでも同様のパターンを保持していることがわかった。この結果から，白保方言は波照間方言と同様に 3 型であり，波照間方言の下降型に対して白保方言の大幅な下降型 (Fa1)，波照間の上昇型に対して白保の小幅な下降型 (Fa2) が対応していると発表者らは結論づけた。

長崎県五島列島諸方言における*rV の変化過程の再建

中村京介

本研究では、長崎県五島列島諸方言における*rV の変化過程の再建を試みる。同方言の多くは,語頭以外の CV 音節で,狭母音を中心とする母音の脱落を経験している。その結果,古い層における*rV は,次の 4 タイプの音変化を被った：①「ラ行そり舌音」への変化（以下,この体系を保持している方言を「r 方言」とよぶ。以降も括弧内も同様。）;②促音ないし内破音・口蓋化した方言（Q 方言）;③i への変化（ i 方言）;④重ね母音への変化（Ｖ方言)。以上の音変化は,上村孝二(1969)「薩摩人の観た五島列島方言の音韻」(『鹿児島大学法文学科紀要 文学科論集』5)や,平山輝男ほか(1969)『五島列島の方言』などによって報告されている。本研究の目的は,先行研究で部分的にしか考察されなかった,上記の 4 タイプの音変化についての時代的前後関係を検証し,*rV の変化過程を復元することである。そのために,発表者は,先行研究のデータと発表者が得たデータの比較を行い,かつ,録音資料を用いて音声学的に妥当な観察に基づく比較法を行うべく,先行研究で調査済みの地点を中心とする 7 地点で調査を実施した。その結果,まず,r・Q・V 方言においては,単一方言内で別の方言タイプにおける音声的実現パターンが,条件異音や自由異音,語彙的に指定される例外的音声として混在することがわかった。このことは,*rV の音変化が連続的で部分的なものであることを示唆する(先行研究では明言されていない考察である)。これをふまえ,諸方言の比較にあたっては,方言タイプ間での*rV の音声的実現パターンの共有のされ方に着目した。その結果,i 方言以外の方言タイプでは*rV>r>Q>V という変化過程が示唆された。これは,上村（1969）の r>Q という見解を支持するとともに,V 方言を Q 方言よりも新しい層として位置づける初の提案である。他方,i 方言は他の方言タイプと音声的実現パターンを共有しておらず,どの方言タイプが i 方言へと分岐したのかを特定することが難しい。そこで,本発表では,[ɾ]と[i]の音色の類似（F2 の周波数帯域が高い）という音声学的な根拠や九州方言における「リ・ルのイへの変化」をもとに,*rV>r>i という仮説の長短について検討していく。

地名漢字「須磨」を用いた景観文字の研究

岡墻裕剛

笹原宏之(2013)『方言漢字』(角川学芸出版)が「方言漢字」と呼ぶように，漢字には地域や位相によって字種・字体・用法・音訓等に変種が存在するが，當山日出夫(2013)「景観文字研究のこころみ―「祇園」の経年変化を事例として―」(高田智和・横山詔一編『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』，彩流社)は非文献資料である看板・道路標識・地名表示といった「景観文字」の中で同じ地名に複数の字体が使用されることを指摘する。

岡墻裕剛(2018)「神戸市須磨区における方言漢字「磨」の研究」(『神戸女子大学文学部紀要』51)は，歴史的文献とともに神戸市須磨区の歌碑類と地域住民の手書き文字を調査し，「磨」の略字としての「广」が室町時代より現代に至るまでこの土地で頻用されることを示した。これに続き，「須磨」の「須」字種について調査を行い，その結果を報告する。

結論としては，この字種は，初唐標準字体「須」と開成標準字体「須」とに大別でき，日本では長らく「須」が優勢であったが，現代の手書き文字では「須」が定着している。一方で，景観文字では「氵」に作るものがあり，行書体では「广」と併せて「氵广」とする例も多い。さらに，この行書体の字形を元に楷書化されたと見られる「東次摩村」なる表記が確認された。

森重敏の万葉仮名論は果たして五母音説なのか？

安田尚道

森重敏（1975）「上代特殊仮名遣とは何か」（『萬葉』89）のことは，『毎日新聞』（昭和 50（1975）年 12 月 1 日夕刊）の学芸欄に，「万葉人も母音は五つ／上代特殊仮名遣い／波紋を呼ぶ新学説」という題で，松本克己（1975）「古代日本語母音組織考」（『金沢大学法文学部論集　文学篇』22）とともに大きく取り上げられた。

森重（1975）については迫野虔徳（1976）「【昭和 49・50 年における国語学界の展望】音韻（史的研究）」（『国語学』105）が，以下のように紹介している。

> 上代語にあっても母音はアイウエオの五つであり，いわゆる乙類というのは，それに「音節緊締」の機能をもつｉが，臨時的にことさらに加重したものであって，その臨時的合成音を，音声の瑣末までかきわける万葉仮名がたまたまうつしだしただけのことだという。

従来，橋本進吉の研究をもとに，金田一京助（1938）『國語史　系統篇』や大野晋（1957）『日本語の起源』が上代語の母音をローマ字で ａｉｕｅｏｉ̈ｅ̈ｏ̈ と書き，母音の数は八個であった，とした。しかし，橋本（1938）「國語音韻の變遷」（『國語と國文學』15-10）は乙類母音の音価を，キ（kïi），ケ（kəi または kəe），コ（kö）のように推定したのだから，金田一・大野は，「kïi」「kəi」「kö」をそれぞれ一個と数えていることになる。

一方森重は，乙類音節の存在を認め，カ行を例にとると，カ（元々カ）・キ$_{甲}$（元々キ）・キ$_{乙}$（元はク＋イ）・ク（元々ク）・ケ$_{甲}$（元々ケ）・ケ$_{乙}$（元はカ＋イ）・コ$_{甲}$（元々コ）・コ$_{乙}$（元はコ＋イ）の八個があった，とするようだから，金田一・大野流に数えれば，八個の母音があった，ということになろうし，もし，〝森重説は五母音説だ〟というのなら，橋本推定音価に基づく母音個数も変ってくることになろう。母音の数を数える際は，母音音声の数を数えるのか，母音音素の数を数えるのか，をはっきりさせないと議論が空回りすることになる。

国語辞書と新聞の使用実態に基づいた日韓外来語の生産性に関する研究

林廷修

本研究では，日韓の辞書と新聞における外来語の使用状況とその生産性について考察した。まず，辞書の考察から得られた結果として，両辞書に占める外来語の全体的な割合は日本語のほうが韓国語より高いことと，日本語における外来語が韓国語より品詞のバリエーションが多いことの二つが挙げられる。また，両言語の生産性をより詳しく見るために日韓共通の外来語を抽出し，「名詞」から「動詞」への派生と「名詞」から「形容動詞」への派生とを両言語間で比較した結果，いずれの場合も日本語が韓国語に比べて他の品詞へ派生しやすいことから，日本語のほうが質的側面でも量的側面でもより生産的であることが確認された。

次に，新聞の調査，分析から得られた結果としては，両新聞における日韓共通外来語の割合に大きな差がないことが挙げられる。また，新聞に出現したすべての外来語の累積相対出現頻度を見た結果，日本語では多様な外来語が幅広く使用されているのに対し，韓国語では特定の外来語のみが頻繁に使用されていることが観察された。最後に，新聞における品詞分布は国語辞書における品詞分布とほぼ同様の結果であった。なお，同じ外来語であっても，日本語が「名詞」から「動詞」へ相対的に派生しやすいことから，日本語が韓国語より生産性が高いという結論が導かれた。

現代日韓両言語における「観察視点の状態表現」に関する研究　―かたりの時間的構成を中心に―

LEE　GYEONGMIN

本研究は，テクストの時間的構成に関する研究の中で，特に日本語と韓国語の「観察視点の状態表現」を中心に考察したい。工藤（1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』は，テクストの中で果たすアスペクトの機能というのは，複数の出来事間の時間関係である＜タクシス＞を表し分けることであると指摘している。また，同時タクシス「継続相」の場合には，登場人物の知覚体験性＝内的視点性の明示の有無で，「完成相」と「継続相」が対立する場合も起こってくると述べている。

本研究は，特に「観察視点の状態表現」において，日本語と韓国語の間で，異なる現象が見られることから，各母語話者のアンケート調査を通して，日韓両言語「観察視点の状態表現」の違いをより明らかにすることを目的とする。

研究方法は次のようである。日韓対訳本を例に，両言語の時制選択要因と「観察視点の状態表現」がテクストの中でどのような意味を持って機能するのかを，各母語話者を対象とするアンケート調査によって検討する。

①日韓対訳本の語りのテクストでの，「観察視点の状態表現」の用例比較

②日韓両言語母語話者に対する「観察視点の状態表現」に関するアンケート調査

調査の結果，日本語では，「観察視点の状態表現」を表す場合，「シテイル形」が用いられる傾向が多かったが，「シテイタ形」と組み合わせながら両方頻繁に現れた。韓国語では，「シテイタ形(～hai’iss-eoss-da)」が用いられる傾向が強い。日韓対訳本を材料に，韓国語を対照させながら，日本語の「時の表現」のテクスト的な分析を進める。

現代日本語にあって現代中国語に欠落している字順の逆転する二字漢語「AB-BA」の出自について
—国語辞典の初出例の出典の問題—

馬雲

本発表は，「AB-BA」のように字順の逆転する二字漢語について，『岩波国語辞典　第七版』（以下，『岩波』）には見出し語として立項されているが，現代中国語の辞書である《現代漢語詞典　第 6 版》（以下，《現代》）には見出し語としていずれも立項されていない語を調査対象とする。これらの二字漢語の古代中国語の文献での使用の有無について確認し，古代中国語で使用されていた場合，その漢字語彙の使用の減少原因について考察し，古代中国語で使用されていなかった場合は，当該の漢字語彙が和製漢語である可能性について検討することを目的とする。

『岩波』と《現代》を調査対象として，『岩波』の見出し語にある二字漢語「AB-BA」のうち，『現代』の見出し語としていずれも立項されていない「AB-BA」を 244 語（122 組）抽出した。「AB-BA」が古代中国語として使用されていたか否かを確認するために，『大漢和辞典』（以下，『大漢和』）を用い，立項の有無と用例の有無を調査した。『大漢和』で立項されていない語と，立項されていてもその用例が示されていない語については，『日本国語大辞典第二版』（以下，『日国』）で調査し，『日国』での立項と用例の有無を確認した。『日国』において用例の出典が日本の文献による語を中国語の辞書である《漢語大詞典》（以下，《大詞典》）で再調査した。

その結果，『大漢和』の見出し語として立項され，かつその用例が中国の文献にみられる 123 語は，古代中国語として文献上で使用されていたことが明らかになった。立項されていない語と立項されているが用例が示されていない語を『日国』で再確認すると，明治時代以降の日本近代の文献に典拠のある用例が多い。『現代』と『大漢和』の見出し語として立項されていない語が現代中国語の辞書の見出し語においても欠落している理由の一つとして，その漢語の出自が日本の近代以降の文献によるものであるということが考えられる。

明治期における漢字存廃論と言文一致論の関係の推移について
—近代日本における漢字と日本語の関係変化を射程にいれて—

張雄善

本発表は近代日本の国字改良の議論において漢字廃止論が優勢になり得なかった原因について，漢字存廃の議論と言文一致論との関係に着目して論じるものである。

日本における漢字廃止論の先駆としてよく知られている前島密の「漢字御廃止之議」は，山本正秀の『近代文体発生の史的研究』(1965)などによって，言文一致論においても先駆として位置づけられている。そのことでわかるように，当初の漢字廃止論と言文一致論は一体のものであった。しかし「表記の平易化」という同じ方向性を持っていた漢字廃止論と言文一致論が，辿ったその後の道筋は，大きく異なっている。その関係性の推移は注目に値する。

本発表では，明治期を大きく３つに分けて，初期は前島密の「漢字御廃止之議」，中期は神田孝平の「文章論ヲ読ム」と西村茂樹の「日本の文学」と「日本の文学続」，井上円了の『漢字不可廃論』と西村茂樹の「国家文運の前途」と「言文一致ヲ論ス」を用いて検討を行い，漢字廃止論の一方策から出発していた言文一致論が，やがては漢字擁護論からも矛盾しないものとなったことを明らかにする。

このことは，あくまで「支那字」にすぎなかった漢字が「国字」の地位を獲得する過程と平行していることを併せて考えれば，ただ単に言文一致論が優勢になったということ以上に，言文一致論を通じて，漢字が日本の文字として再認識されるようになったことを意味する。

近代における和語動詞の主要表記の交代

髙橋雄太

本発表では，近代語の雑誌コーパスを用いて，近代において語に最もよく使用される漢字表記(主要表記)が経年によって別の漢字表記に交代する語を網羅的に抽出し，何故そのような変化が起こったのか，その要因を明らかにすることを目的とする。本調査では近代雑誌コーパスにおける 100 万語あたりの相対頻度 48 以上の和語の動詞 259 語を対象とし，主要表記が交代する語 38 語(14.8%)を抽出した。これらの語のすべてについて，変化の過程を分析してその要因を考察する。

分析の方法としては，はじめに，それぞれの語の意味を分析し，共起語や格の表示の異なりから意味の区分を立てた。その意味の区分に従って近代語の雑誌コーパスの用例を振り分けて，意味と表記の結びつきを観察した。例えば，イレルという語には「物を箱にイレル」のような〈外部から特定の範囲・場所に移す〉意味，「明りをイレル」のような〈ある状態に達するようにする〉意味，「願いをイレル」のような〈受け入れる〉意味が認められ，これに従って 3 つの意味の区分を立てて，近代語の雑誌コーパスの用例を振り分けた。その結果，明治中期の段階で優勢であった〈受け入れる〉意味が勢力を減じ，〈外部から特定の範囲・場所に移す〉意味が勢力を増す変化が観測でき，またこの意味の勢力図の変容に連動して，〈受け入れる〉意味と結びつきの強い「容」が勢力を減じ，〈外部から特定の範囲・場所に移す〉意味と結びつきの強い「入」が勢力を増すことを確認した。このような作業を 38 語全てに行った結果，38 語中 34 語に，意味の勢力図の変容に連動する主要表記の交代が確認でき，このことから，近代において和語動詞の主要表記が交代する現象の直接的な要因は，語の持つ意味の勢力図の変容であることがわかった。また，近代においては表記の変化と語の意味の変化は連動しており，語を表記するときには，語の意味と関連付けて表記を選択していたことが考えられた。

『国語年鑑』の分野区分にみる研究動向の変遷

八木下孝雄

『国語年鑑』は，1954 年から 2009 年まで国立国語研究所で刊行されていたもので，研究文献情報（以下「文献情報」とする）を中心に学界の情報が掲載されていた。文献情報は，当然ながら当時の研究の状況等が反映されたものになっており，それらを分析することで，1950 年代以降の日本語研究の動向を見ることができる。

これまで，長期間にわたる日本語研究全体の研究動向について見たものは多くない。本発表では,『国語年鑑』の文献情報の分野区分を見ていくことで,日本語研究が 1950 年代以降どのように行われてきたのかを概観することを目的とする。

『国語年鑑』の文献情報は，創刊号の 1954 年版から 1989 年版までは，刊行図書・雑誌論文・新聞記事の３つの区分で，また，1990 年版からは刊行図書・雑誌論文の２つの区分で情報が掲載されている。刊行図書・雑誌論文の文献情報は，それぞれ分野ごとに整理されている。分野は，大きな分野の中に下位の分野がつけられており，３層から５層の構成になっている。

本発表の方法としては,『国語年鑑』に掲載されている文献情報のうち，特に掲載件数の多い，雑誌論文の分野区分を調査する。分野区分の変遷を分析し，そこから見られる日本語研究の動向について考察を加える。

『国語年鑑』の分野区分の決定は，文献情報を作成した担当者によるものであるが，学界の研究動向とは無関係ではないだろう。分野区分の変遷を分析することで，1950 年代から 2000 年代までの日本語研究の動向について把握できることが見込める。

疎の関係の人物への依頼場面で使用される許可求め表現に関する実態調査

辻岡咲子

「(して)もらって(も)いいですか」のようなモラウ系許可求め表現の使用場面を明らかにするために，若年層 30 名を対象に，記述式と選択式の 2 種類のアンケートを期間を隔てて実施し，それらの回答の比較を行った。

設定した場面は，①上下関係(目上と目下)の有無，②役割関係(学生と先生，客と店員)の有無，③人間関係の継続性の有無により，(1)／(2)(3)(4)／(5)(6)の 3 つに区別される。

場面設定	上下	役割	継続性
(1) ゼミの先生に対して論文の添削を頼むとき	あり	あり	あり
(2) ホテルのカウンターでスーツケースを預かってもらうよう頼むとき	なし	あり	なし
(3) 飲食店で注文したデザートがいつまで待っても出て来ないため持ってくるよう頼むとき	なし	あり	なし
(4) インターネットで購入した DVD が破損していたため，電話で商品の交換を頼むとき	なし	あり	なし
(5) 荷物で手がふさがっているため，エレベーターで初対面の目上の人に階数ボタンを押してもらうよう頼むとき	あり	なし	なし
(6) 電車の中で初対面の目上の人に対して席をつめて座るよう頼むとき	あり	なし	なし

①上下関係が優先的に意識される場面(1)では，敬語形イタダクを用いた表現が使用され，モラウ系許可求め類の表現は，許容されにくいが，記述式アンケートの結果から，「お願いしてもいいですか」の使用が広がっていることがわかった。②役割関係が意識される場面(2)～(4)では，選択式アンケートの結果によるとモラウ系許可求め類の表現は許容されるが，依頼表現として既に定着している表現の使用の方が妥当とされる。③人間関係の継続性と役割関係が生じない場面(5)(6)では，記述式アンケートの結果とあわせて見て，モラウ系許可求め類の中でも「してもらって(も)いいですか」が非常に選ばれやすいということが明らかになった。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』新聞・書籍・雑誌データの助動詞に対する用法情報付与

加藤祥，浅原正幸，山崎誠

2018 年までに，著者によって『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のコアデータに含まれる書籍サンプル（PB），雑誌サンプル（PM），新聞サンプル（PN）の部分集合（347,094 語）に対し，『分類語彙表増補改訂版』（国立国語研究所，2004）の分類語彙表番号を付与する作業が行われた。しかし，分類語彙表には機能語の情報がほとんどないため，自立語のみに意味情報が付与される結果となっていた。そこで，自立語に意味情報（分類語彙表番号）が付与されたコーパスの助動詞にも意味情報（用法情報）を付与することにした。本発表は，作業内容と基礎データのほか，データを用いた調査例を報告する。

作業対象の助動詞は，『現代語の助詞・助動詞』（国立国語研究所報告 3，1951）の第二部（助動詞）に掲載された 27 種類とし，分類（用法の詳細説明）や用例の確認は同書に拠った。助動詞の用例を収集するにあたっては，辞書見出し語にあたる語彙素を用いた。本作業により，25,892 短単位に助動詞の用法分類が付与された。

この結果，助動詞を用法によって調査することが可能となった。たとえば，本作業の結果を用いて，助動詞が用法別にどのような分布を示しているのか，書籍・雑誌・新聞のレジスタ情報を用いた調査が可能となった。また，自立語に付与されている分類語彙表番号（意味情報）を用いることで，助動詞がどのような意味（分類）の語と接続するときにどのような用法で用いられる傾向があるのかを調査することもできる。このほか，用法に特化した助動詞用例の収集が可能となったため，たとえば「類似」用法の助動詞（「ようだ」「みたいだ」「ふうだ」「らしい」など）を手掛かりとした比喩表現の可能性の高い用例の収集などもできるようになった。これらの集計例を示すとともに，分類語彙表番号と助動詞の用法情報を付与したデータを用いたデモンストレーションを行う。

『日本語歴史コーパス』への追加情報の付与と共有　―中古和文の「る」「らる」を例に―

小木曽智信

『日本語歴史コーパス』では，すべての語にその位置を示すユニークな ID が付与されており，これを利用することで用例を指し示すことができる。たとえば，『土佐日記』の中で最初に現れる助動詞「る」の用例（「守の館より，呼びに文持て来たんなり。呼ば【れ】て到りて，日一日，夜一夜，とかく遊ぶやうにて明けにけり。」）は，サンプル ID が「20-土佐 0934_00001」，開始位置（サンプル先頭からの文字位置）が「5020」の語であり，「20-土佐 0934_00001,5020」という位置情報によって「中納言」の位置検索機能で参照できる。また，下記のような URL とすることで用例を指すパーマリンクとしても利用できるようになっている。

https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/permalink?unit=short&position=20-土佐 0934_00001,5020

（position 以降が位置情報。「中納言」ユーザーであればログイン後にこのアドレスで当該例を表示・確認できる。）

この位置情報を用いることで，用例集を作成することができるほか，用例に用法分類などの研究で必要となる情報を付与して残すことも可能である。こうしたデータはユーザーによる追加情報の付与はコーパスへのアノテーションとして位置づけられ，コーパス本体とは切り離して配布し，研究者間で相互に参照，共有したり，再利用したりすることができるデータとなる。

こうした試みの例として，『日本語歴史コーパス』の中古の仮名文学作品（『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『紫式部日記』『更級日記』等）に現れる助動詞「る」「らる」について受身・尊敬・自発・可能の用法分類を実際に行い，コーパスの位置情報を用いて用法分類つき用例集を作成して下記のようにオープンデータとして公開した。

小木曽(2019)「CHJ 中古「る」「らる」用法分類アノテーションデータ」https://researchmap.jp/mu1dor8so-12361/

発表では，こうしたアノテーションデータを作成する方法と留意点，配布されたデータの利用方法について論ずる。

コーパスを使った方言研究の開拓　―『日本語諸方言コーパス（COJADS）モニター版』を使って―

大槻知世，上村健太郎，カルリノ・サルバトーレ，佐藤久美子，中澤光平，木部暢子

近年，各国における言語研究では，大量のデータの整備と大規模コーパスの構築が進み，新たな発展を見せている。一方，国内の方言研究においては，個別の方言ではいくつか音声が公開されている（日本放送協会（1959～1972）『全国方言資料』，杉藤美代子代表（1989～1992）科研費特定領域研究「日本語音声」研究成果 CD，国立国語研究所「日本の消滅危機言語・方言」データ公開のページ http://kikigengo.ninjal.ac.jp/ほか）。しかし，全般としてデータ整備が遅れており，大規模の通方言的な方言コーパスはこれまで存在しなかった。これに対し，発表者は諸方言を横断的に検索できる『日本語諸方言コーパス（Corpus of Japanese Dialects: COJADS）』の構築を進め，2019 年 3 月にモニター版を公開した。本発表では，COJADSを活用することで，方言研究における新展開が期待できることを述べる。 COJADSの基となるデータは，文化庁の『各地方言収集緊急調査』（1977～1985年に収録された自然談話資料）である。データは音声，方言テキスト，標準語テキストから構成され，時間情報により相互に紐付けされている。モニター版は，全国48地点，各地点約30分，合計24時間のデータよりなるコーパスである（2021年度には計75時間以上のデータを公開する予定）。検索方法は，①共通語から方言を検索する方法，②方言の文字列を検索する方法，③タグによる検索の３種類がある。発表では COJADS モニター版による検索結果をもとにした研究方法を提示するとともに，COJADSによるデモンストレーションを行う。

調査票調査（エリシテーション）は方言の体系的記述には欠くことができない。しかし，次のような欠点があることも指摘されている。①調査票の枠から漏れた形式を見つけることが難しい。②実際の使用場面に即した言語運用の情報が漏れることが多い。これを補うのがコーパスを含むテキストである（下地理則(2011)「文法記述におけるテキストの重要性」『日本語学』30(6)：46-59)。本発表では，音声，方言テキスト，標準語テキストを備えた COJADS モニター版を活用した研究実例として，４つの例：形態音韻論的研究，統語論的研究，フィラー研究，音調研究，を挙げる。

国立国語研究所収蔵音声・映像資料と試視聴システム

高田智和，石本祐一，関川雅彦

国立国語研究所は，1948（昭和 23）年 12 月の創設以来，70 年にわたって，日本語に関する様々な課題を対象に，調査研究を重ねてきた。各調査研究の成果は報告書や論文として公刊されてきたが，研究の一次資料に相当する調査票・録音（音声資料）・録画（映像資料）も現存する。現在それらは国立国語研究所・研究資料室に保存され，集中管理されている（資料群の目録は「国立国語研究所 研究資料室収蔵資料」https://rmr.ninjal.ac.jp/にて公開）。

音声・映像資料は，談話収録や面接調査の記録であり，オープンリール（約 2,800 点），8mm テープ（約 250 点），カセットテープ（約 17,000 点），VHS ビデオテープ（約 600 点），ベータビデオテープ（約 200 点），デジタルビデオ（約 1,800 点）など，様々な媒体で保存されている。しかし，媒体の経年劣化と，再生機器の生産中止などにより，録音・録画の視聴が困難になってきている。そのため，デジタル音声（wav，mp3）・映像（AVI，mp4）への媒体変換を進めている。2019 年 3 月現在，デジタル化済みの音声資料は 21,150 点，映像資料は 845 点である。

デジタル化の目的は音声・映像資料の保存と再利用である。近年のオープンサイエンスの主旨に照らせば，調査研究の一次資料は，検証可能な状態で保存・提供されねばならない。また，過去の録音・録画を再利用し，新たなデータ群を作成した上で分析を行おうとするニーズもある。2018 年度からは，「所蔵音声・映像データベース」を運営し，所内限定利用であるが（個人情報保護のため），研究・教育を目的とする外来者の来館利用にも提供している。「所蔵音声・映像データベース」は，デジタル化済みの音声・映像資料を収録し，ファイル情報のメタデータ検索と，専用プレイヤーによる再生環境を備えた試視聴システムである。

『日本語歴史コーパス』の今とこれから

小木曽智信，松崎安子，村山実和子，近藤明日子，南雲千香子，高田智和，片山久留美

国立国語研究所で設計と構築が進められてきた『日本語歴史コーパス』(CHJ) は，現在までに下の表に☑で示した多くのサブコーパス（CHJ を構成する時代・ジャンル別の資料群）が利用可能になり，広く研究に用いられるようになってきた。2019 年 3 月には，下表に■で示したサブコーパスが新たに公開されるほか，下線を付したサブコーパスのデータ更新を行った。Web 上のコーパス検索アプリケーション「中納言」も，原文文字列の表示や外部サイトの原本画像の表示などにも対応するなどの機能拡張を行ってきたが，今回は新たに掛詞や洒落などの多重の形態論情報の利用を可能にしている。

『日本語歴史コーパス』構築の進捗状況（2019 年 3 月）

奈良時代	☑万葉集　□宣命	
平安時代	☑仮名文学	■和歌集
鎌倉時代	☑説話・随筆　☑日記・紀行　□軍記	
室町時代	☑狂言　<u>☑キリシタン資料</u>	
江戸時代	<u>☑洒落本</u>　■人情本　□近松	
明治・大正	<u>☑雑誌</u>　☑教科書　■明治初期口語資料　□文学作品　□新聞	

本ワークショップの前半では，下記の通り，CHJ の現状について司会が概要を説明したのち，各サブコーパスの新規公開や更新の詳細についてそれぞれのサブコーパス構築担当者が発表を行う。

司会者発表：『日本語歴史コーパス』の今：小木曽智信

CHJ の現状と構築計画について紹介し，今後コーパスに追加すべき資料についてのアンケートの説明を行う。

発表１：CHJ「和歌集編」（八代集）の構築と公開：松崎安子

新たに公開した CHJ「和歌集編」について報告する。国文学研究資料館が公開している正保版本『二十一代集』のうちの八代集に短単位情報を付与し，原本画像や「新大系」本文へのリンクを可能にした。

発表２：CHJ「江戸時代編Ⅰ洒落本」の拡張と「江戸時代編Ⅱ人情本」の公開：村山実和子

CHJ「江戸時代編Ⅰ洒落本」のアップデートと，新たに公開した「江戸時代編Ⅱ人情本」について報告する。臨時的なふりがなや洒落などに対応するため，新たに多重に形態論情報を付与する試みを行った。

発表３：CHJ「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」の構築と公開：近藤明日子

明治 0 年代から 10 年代にかけて刊行された口語体資料 10 作品をコーパス化した CHJ「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」について報告する。『安愚楽鍋』と啓蒙書『交易問答』『百一新論』等の資料を収録している。

発表４：CHJ「明治・大正編Ⅰ雑誌」の拡充 ―『東洋学芸雑誌』のコーパス化と公開―：南雲千香子・近藤明日子

CHJ「明治・大正編Ⅰ雑誌」は概ね 8 年おきに大正末までカバーしていたが，明治 14，15 年の資料が不足していた。これを補うために新たに『東洋学芸雑誌』(1～15 号) を収録し，アップデートしたことを報告する。

発表５：大英図書館所蔵 天草版『平家物語』『伊曽保物語』『金句集』の画像公開とコーパス連携：高田智和・片山久留美

イギリス大英図書館の協力の下，天草版のカラー画像を国立国語研究所ウェブサイトから公開することが実現した。この画像公開サイトと CHJ「室町時代編Ⅱキリシタン資料」から画像へのリンクについて報告する。

ワークショップの後半では，会場で配布・回収したアンケートにもとづいて，前半の発表に対する質疑応答を行ったのち，「**『日本語歴史コーパス』のこれから**」と題して討論を行う。質と量の両面で充実してきた CHJ だが，まだまだ不足する点は多い。たとえば，収録資料が主要文学作品に偏っていることから，ジャンルの幅を広げていく必要がある。特に近世・近代では残されている資料が膨大であるため，追加すべき資料の選定が重要である。また，文節境界の情報付与，地の文・会話文・和歌等を区別する「本文種別」や話者情報の充実，などアノテーションの充実も課題である。長期的な展望を描くためにも，アンケートをもとに「通時コーパス」を今後どのように拡張していくべきか，議論を進めたい。